

これまでに相当研究されており、また、宗祇およびその周辺の連歌師については、伊地知氏自身が旧著『宗祇』において究めつくしておられるだけに、新見の出しにくい分野である。しかし、四十年近くの間、連歌一筋に精進を続けて来られた著者の学識の深さが、行間におのずとにしみ出ている、この部分もやはり読者を魅了せずにはおかない。それにつけても、本書の叙述を、室町中期でうち切つてあるのが、何としても惜しまれる次第である。

これまでの簡単な紹介で明らかのように、本書は初学者の入門書であることを意図して執筆されたものであるにもかかわらず、その内容は連歌研究の現在における到達点を示しており、確實で豊富な資料に基いた客観的な叙述は、何人にも信頼感を与えずにはおかない。しかし、それだけに、連歌が形成され展開してゆく過程の中で、これまでに論ぜられてきた重要な問題点のいくつかに関しては、氏独自の見解だけでなく、対立する諸説その他を、ごく簡単にでも注記しておいていただきたいと思ったことである。妄評多謝。

(昭和四十二年八月、吉川弘文館、九六〇円)

村井 順著

「常縁本徒然草」の解釈と研究

小林 保 治

「常縁本」の本文は、昭和三十四年、はじめて古典文庫から、

その後、大修館から版行されているので、本書は三番手ということになるが、全段に及ぶ「解釈と研究」の書としては最初のものである。

巻頭に、「常縁本『つれづれ草』が原形本に近い理由」「吉田兼好と『徒然草』の二論文と『徒然草』の諸本」なる簡略な書誌解題を据え、以下に「常縁本」の上下二巻全段について、通釈・語釈・研究を加えたもので、章段の配列は「常縁本」に順っているが、巻末に「流布本段名による索引」を付して、流布本との対照を便ならしめている。

本文についてみると、「遺誠、あわただしく、追難、返事、食欲」等の例によって知られるように、読みかたは常識的な慣用にしたがつており、今日の中世語研究の成果を必らずしも充分には取り入れておられぬようである。右の諸例はそれぞれ「遺誠、あわただしく、追難、返事、食欲」とあるべきところである。しかし、写本の原文そのままの翻刻でなく、「誤字と認められるもの」の一部「や」「あて字や仮名使いの、今日の習慣に合わないもの」を訂正し、「句読点・濁点」を適宜施してあるのは、「常縁本」が一般に普及することを願って、理解しやすくしようという意図に発したことであって、安易な本文の改変は筆者自身も厳しく誠めておられる所であり、本書の大きな瑕疵となるものではない。

本書が「常縁本」の存在と価値とをひろく訴えようとする情熱に貫かれていることは、「語釈」の項にもうかがわれる。たとえば、ほんの一例であるが、「一きは一段、一層、副詞。やや少し、副詞。ことごとしく―大げさに。さだかに―はつきりと、形

容動詞、連用形。しのぶ―なつかしがる、思いしたう、バ行四段、連体形。返す―ほんとはほんとに、副詞。しひて―無理に、副詞。まさしく―たしかに、形容詞、連用形。つひに―とうとう、副詞。」といった、かゆい所に手の届くような懇切な説明は、著者が低学年の高校生あたりを本書の読者として予想しながら筆を進められたことを意味しよう。品詞名や活用形などがいちいちと言ってよい位に示されているのには、ややくどいという印象をうけるが、それもみな如上の理由にもとづくものと解せば領けることである。

「語釈・通釈」の項にみられる特色は、平安朝文学に造詣の深い著者が、「兼好が読んだ以上に『枕草子』を読まなくては、『徒然草』の真の理解はできない」との信念から、『枕草子』の知識にとほしいため」に生じている（と著者が考える）数々の「誤訳」を正そうとしておられる態度で、『枕草子』との模倣・影響関係の認められる章段として、1・19・22・24・32・43・72・76・77・78・79・104・105・107・113・139・160・170・175・190・233・240等の諸段を挙げておられるのも、これから、『徒然草』について考えようとする者には看過できない指摘といえよう。

「研究」の項は、もっぱら「流布本・正徹本」との比較において、「常縁本」がいかに善本であるかを実証することにあてられている。それは「常縁本『つれづれ草』が原形本に近い理由」十二カ条について論じている巻頭論文と相呼応するものである。

吉田幸一氏は、古典文庫の常縁本（下巻）の解説の中で、「常縁本は、正徹本に包含されてゐる先行本数本とは全く別な経路を

経て伝はつた、章段順序を異にする別本であり、（中略）或ひは、つれづれ草の原形本の――未推敲の初稿本系の転写本かも知れない―を伝へたものではあるまいか云々」と、かなり控えめに「常縁本」と祖本との近さを述べられたが、本書の著者はその所説をうけて、断定的な口調で、「常縁本」が「従来どの本文より純粋度の高い善本」であり、その発見が『徒然草』研究の上で、いかに画期的な出来事であるかを熱っぽく強調する。そして、同じく吉田氏の「正徹本善本説への疑問」を肯定した上で、流布本は「まっかな似せ物」であり、「最悪本」であると断じられる。

これはたいへんなことである。もし、著者の言われるように「常縁本」が現存する『徒然草』諸本の中で最も祖本に近いものだとするならば、「来意説」をはじめとして、主に流布本によってなされてきた従来の研究の多くは否応なく再検討を迫られるわけで、著者が「とにかく、『徒然草』研究は、常縁本から再出発しなければならなくなつた」と力をこめて説かれるのも、むべなるかな、ということになる。

しかるに、最近（去る三月）、高栗勲氏の大作『徒然草の研究――校本と解釈的研究――』が刊行されたが、それによると、氏は数ある『徒然草』の諸本を博覧された後、それらを（一）嵯峨本系、（二）貞徳本系、（三）桂宮本系、（四）正徹本系の四系統に類別し、「常縁本」には桂宮本系十六本のうちの一本という位置を与えて、「かなり古い本文を伝えるものであるが、その伝写の間に正徹本の同類本の本文によって一部改訂がこころみられたもので、この点他の桂宮本系の諸本とやや異つた本文となつていて、八坂本と近親関係に

あり、この二本は桂宮本系の一別系の同類本であるとしなければならぬ」(傍点筆者)と結論づけておられる。高乗氏も「常縁本の本文がかなり原作に近い本文をもっている」点は認めておられるのであるが、「常縁本系」という系統を特立しておられぬことは、氏が本書の著者ほどには「常縁本」の独自性を評価されていないことを意味しよう。しかし、傍点の箇所によって推量するに、「常縁本系」を別立する余地は全く無いわけではないようであり、なお、残された課題とすべきであろう。

ともあれ、『徒然草』に関心を持たれる人には見逃しえぬ労作として一読をすすめたい。

(昭和四十二年十月、桜楓社、A5四七五頁、二八〇〇円)

辻村敏樹著

「現代の敬語」

宮 地 裕

本書は、多年にわたって、主として近世・現代の日本の敬語についての研究を積みかさねられてきた著者が、そのおおくの論文のうちから、比較的一般むきのものをえらんでまとめられたものであって、その内容はつぎのとおり。

第一部 実践編

現代の敬語とその使い方(『日本文法講座』5、一九五八)
敬語の誤り(『国語学』21、一九五五)

敬語の行き過ぎ(『国文学研究』11、一九五五)

第二部 理論編

敬語の分類について(『言語と文芸』5の2、一九六三)

現代語の敬語表現(『国文学』一九六三・一)

現代敬語の傾向(『講座現代語』6、一九六四)

動作を表わす敬語(『国文学』一九六〇・一)

敬語の可能の言い方(『解釈』一九五五・八)

形容詞と敬語(『口語文法講座』3、一九六四)

敬語の語尾と助動詞(『国文学』一九六四・一〇)

現代の敬語意識(『解釈と鑑賞』一九六五・五)

敬語の移り変わり(『朝日新聞』一九六五・三・一五夕)／＼表題は所載誌のものとすこしちがうものもある。▽

著者が、その論文を、ほとんどすべて「です・ます体」で書かれることは、学界周知のところだが、それはちょうど評論における中村光夫氏のものののように、対象を精密にしらべ観察し、明晰に分析し解釈して、そのうえで、わかりやすく記述するという基本的な態度から出ているとおもわれる。それはまた、気だらず気ばらずに、めんどろな日本の敬語の諸現象を、平明に解きあかすちからによってこそ可能な、また、意味のあることであるとともに、ほかならぬ敬語のひとつである「です・ます」そのもののへ、著者の視点をしめすものでもあらう。

たまたま、本書の性格上、ここにおさめず、あとにのこされて「改めて一本としたい」とされた著者の代表的な論文『お……になる』考(『国文学研究』25、一九五一)、『貴様』の変遷